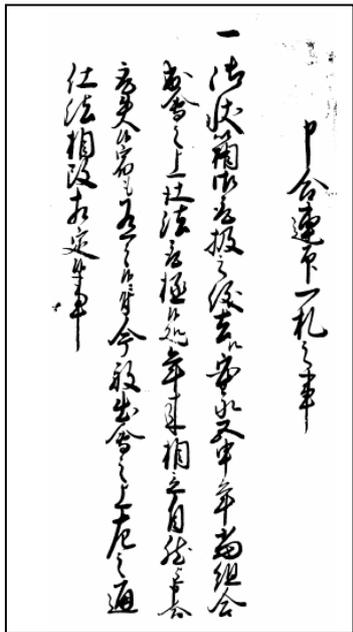


# 有之、無之（これあり、これなし）

前回の続きです。(g)は最初の **自** は「自」です。次の **然** は大きく崩れていますが、「然」。「被」にも見えるかもしれませんが、「被」の場合は、もっと小さく書かれます。**然** はよく出てくる崩しですので、ここで覚えておいた方がいいと思います。次の **与** は「与」という字が少し中心をずらして書いてあります。これは「与」と書いて「と」と読みます。次は



「申」で、次の **合** は「合」なので、(g)は「自然と申合」となります。



(h)は最初の **取** は、前回出てきた「取」です。前回 (**取**) よりも崩しがきつくなっていますが、字の雰囲気をつかんでいれば読めるでしょう。次は「失」です。**失** も、この崩し方では2回目ですが、「候」。**宿** は第1回で出てきた「宿」です。次の「も」は崩してありません。



今回のポイントは次の **有** です。2文字にも見えますが、この字は、頻出する字で「有」という字です。次の **之** は「之」で、「有之」と書いて「これあり」と読みます。江戸時代独特の言いまわしです。似たような言葉に「無之」（これなし）もあります。この使い方は、これから何度も登場します。

次の **候** は「候」。最後の **付** はこの字だけだと迷いますが、その前に **二** とあるので、「候二付」という“よくある言い回し”を思い出して、**付** は「付」でOK(矛盾しない)、となります。

前回の(f)と今回の(g)(h)をまとめると、「<sup>ねんらいあいた</sup>年来相立ち、<sup>もうしあわせと</sup>自然と申合 <sup>うしな</sup>取り<sup>そうろうしゅく</sup>失<sup>しゅく</sup>候 <sup>そうろう</sup>宿もこれあり候につき」となります。「相立」の「立」は「経」という字の代わりに当て字で使っています。何年も<sup>た</sup>経ったので、自然と申し合わせ(仕法)を紛失してしまった宿もあるので、くらしい意味でしょうか。

この「立(経)」のように、江戸時代には、“読み”さえ合っていれば、当て字を使うケースが多くあります。たまに人名でも「又次郎」を「亦二郎」と書いていることもあります。